

# 説明補足資料

第2 生乳及び牛肉の需要の長期見通しに即した生乳の地域別の需要の長期見通し、生乳の地域別の生産数量の目標、牛肉の生産数量の目標並びに乳牛及び肉用牛の地域別の飼養頭数の目標

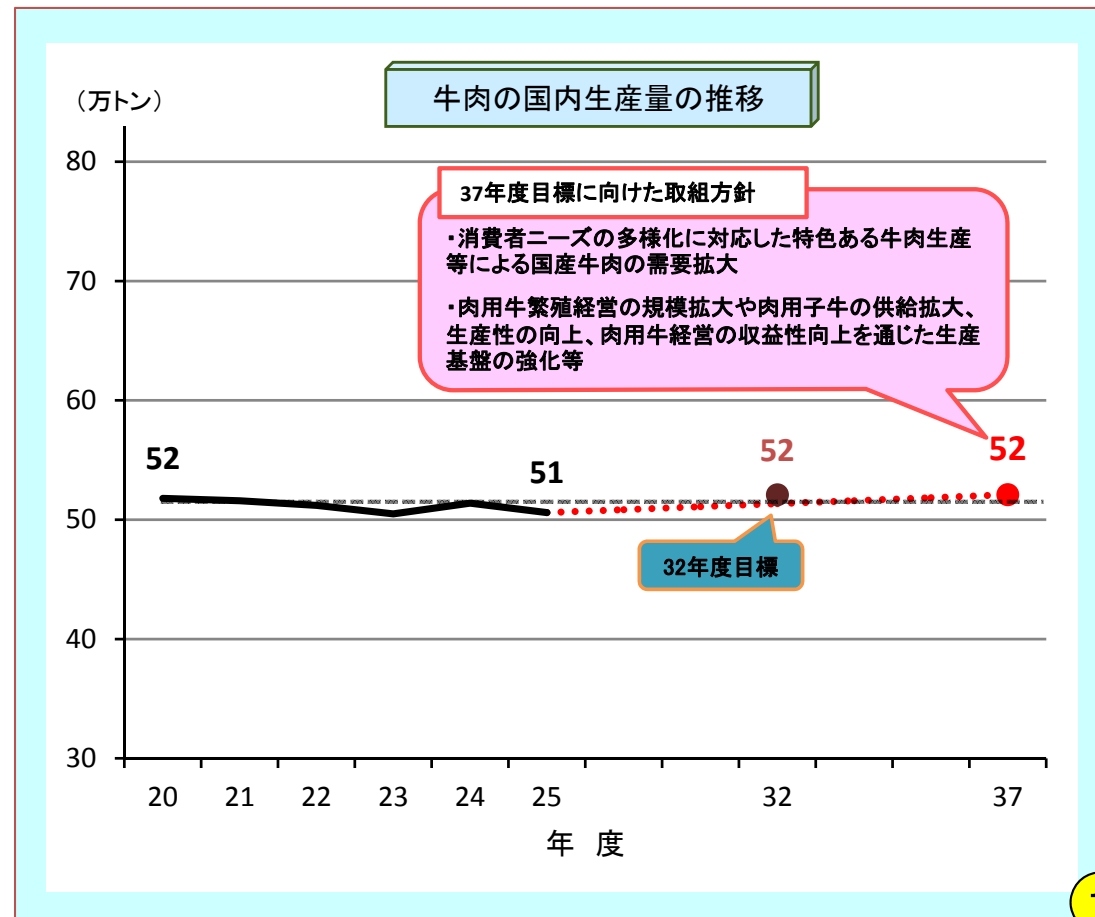
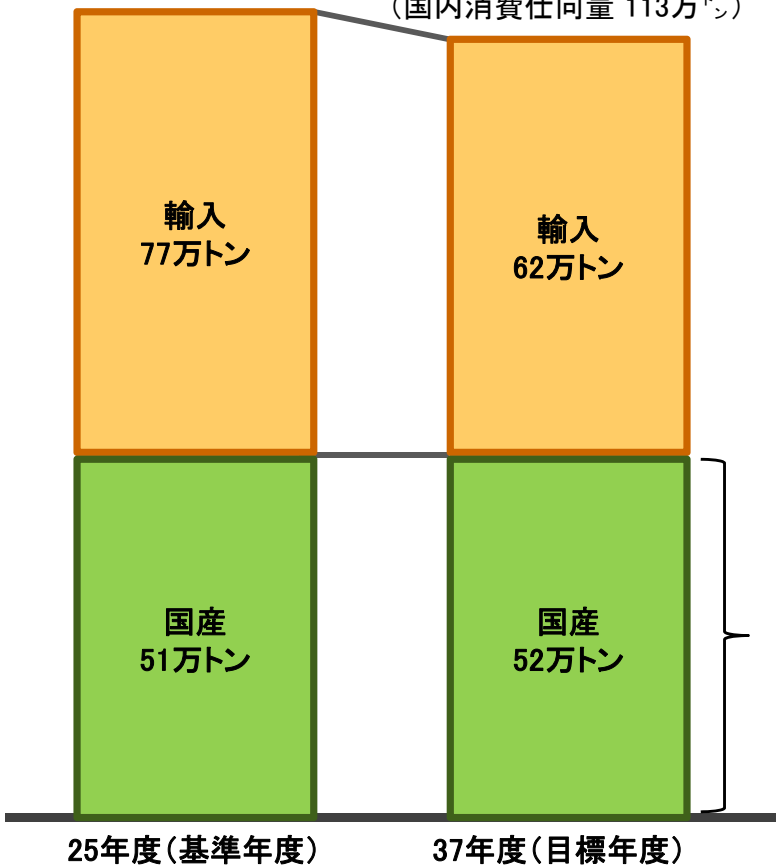
平成27年3月  
農林水産省生産局畜産部

# 牛肉の需要の長期見通しと生産数量目標について

## 牛肉の生産数量目標：52万トン

- 平成37年度の牛肉の1人当たり消費量については、高齢化の進展による摂取カロリーの減少を見込むものの、消費者ニーズに対応した特色ある牛肉生産等による需要拡大も見込み、現状とほぼ同水準と設定。これと、37年度の推計人口から、国内消費仕向量は、現状から9%減少の113万トン(枝肉換算)と推計。
- これに対し、生産数量目標については、近年の国内生産が51~52万トン(枝肉換算)の範囲で安定的に推移していること、今後、消費者ニーズの多様化に対応した特色ある牛肉生産、生産性の向上、生産基盤の強化等、生産面での取組を引き続き進めていくことを踏まえ、32年度目標と同じ52万トンと設定。

(国内消費仕向量 124万トン) (国内消費仕向量 113万トン)



# 肉用牛の飼養頭数の目標について

## 肉用牛の飼養頭数の目標: 252万頭

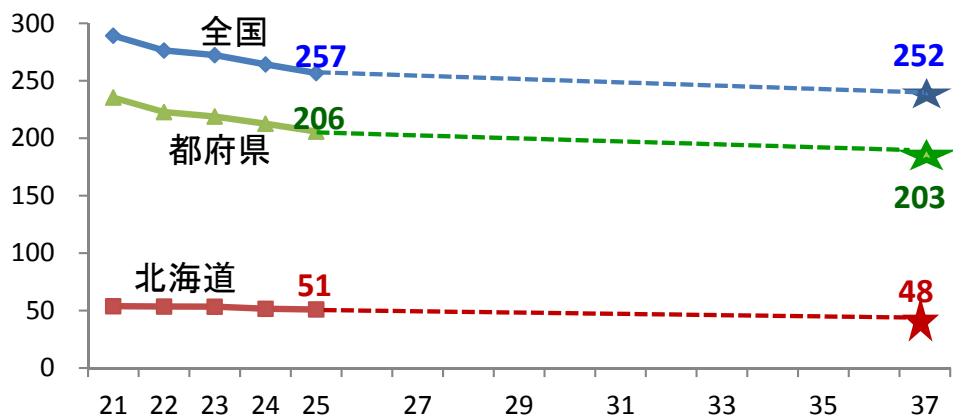
- 37年度の牛肉生産量(枝肉換算)は、人口減少や高齢化の進展等による牛肉の総需要量の減少が見込まれる一方、消費者ニーズの多様化や生産基盤の強化等の取組を踏まえ、目標を52万トン(25年度比+1万トン)に設定する。
- この牛肉生産量は、家畜改良の進展や生産性向上(分娩間隔や肥育期間の短縮、増体量の増加等)を織り込んだ上で、37年度の肉用牛飼養頭数の目標を現行の257万頭から252万頭(同▲5万頭・▲2%)と設定し、達成を図る。
- この際、以下のような牛肉の生産構造の強化を図ることにより、国産牛肉の需要に対応した生産量の確保を目指す。
  - ① 肉専用種(和牛)については、繁殖雌牛の増頭による繁殖基盤の強化を推進する。
  - ② 酪農経営における性判別・受精卵移植技術の活用により、乳用後継牛を効率的に確保した上で、空いた腹を利用し和子牛の生産を拡大する。
  - ③ これらにより、肥育経営においては、乳用種(交雑種を含む)から肉専用種への転換が図られる。

### 牛肉生産量及び肉用牛飼養頭数の目標

	25年度	37年度
牛肉生産量(万トン)	51	52
肉用牛(万頭)	257	252
うち肉専用種	172	186
うち乳用種	85	65

### 肉用牛の飼養頭数の目標

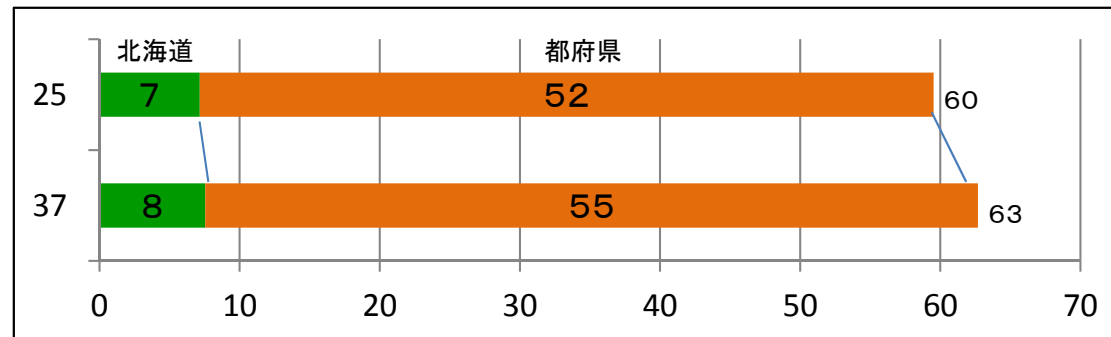
(単位: 年度、万頭)



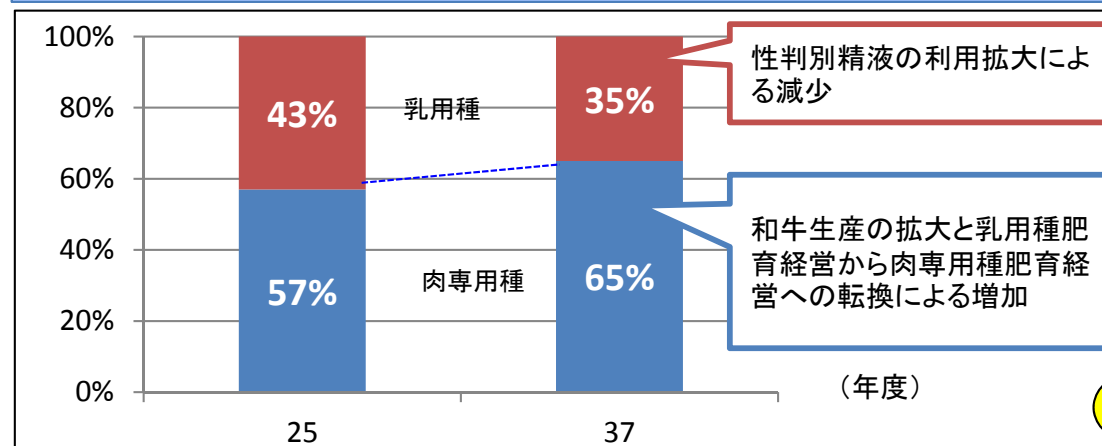
注: 地域ごとの目標は幅をもって設定するが、本資料ではその幅の中央値を記載。

### (参考1) 繁殖雌牛の増頭の見込み

(年度、万頭)



### (参考2) 育成・肥育牛の飼養頭数の変化(見込み)



# 肉用牛の飼養頭数の目標の考え方について

## 繁殖雌牛

- 繁殖雌牛の飼養頭数は、近年、飼養戸数の減少に伴い減少傾向で推移してきたが、今後、各種施策の実施等による全国的な繁殖基盤の強化に向けた取組を推進し、約3万頭の増頭を目指す(60万頭→63万頭)。

## 和子牛

- 繁殖雌牛の増頭に加え、初産月齢の早期化(24.4か月→23.5か月)や分娩間隔の短縮(13.3か月→12.5か月)等の取組により、和子牛生産の増加を図る。
- さらに、酪農経営における性判別精液を活用した乳用後継牛の効率的な確保と空いた腹への和牛受精卵移植の取組を推進することにより、酪農由来の和子牛生産拡大を図る。

## 肉専用種育成・肥育牛

- 和子牛の生産拡大による肥育素牛の増加が図られる中で、肥育期間の短縮(20か月→16~18か月)や増体量の増加(枝肉重量:475kg→480kg)の取組が進展することを織り込み、肉専用種育成・肥育牛の飼養頭数が約11万頭増加する(112万頭→124万頭)。

## 乳用種(交雑種を含む)

- 生乳生産目標数量(750万トン)の達成に必要な乳用雌牛の頭数は、1頭当たり乳量の増加(8,100kg→8,700kg)等により、約3万頭減少する(89万頭→86万頭)。
- 一方、乳用後継牛確保のための性判別精液の利用割合が増加する(約1割→約2割)。
- これらの結果、乳おす・交雑種子牛の生産頭数が減少し、段階的な乳用種(交雑種を含む)肥育経営から肉専用種肥育経営への転換が図られる。

# 肉用牛の地域別の飼養頭数の目標

## 肉用牛の地域別飼養頭数

(単位:万頭)

地域別目標	現状 (25年度)	目標 (37年度)
全国	257	252
北海道	51.0	46.0 ~ 50.8
都府県	205.7	193.0 ~ 213.3
東北	34.7	32.7 ~ 36.1
関東	30.4	27.7 ~ 30.6
北陸	2.7	2.5 ~ 2.7
東海	11.7	10.7 ~ 11.8
近畿	8.3	7.8 ~ 8.7
中四国	18.6	17.0 ~ 18.7
九州	99.3	94.7 ~ 104.7

## (参考)繁殖雌牛の地域別飼養頭数

(単位:万頭)

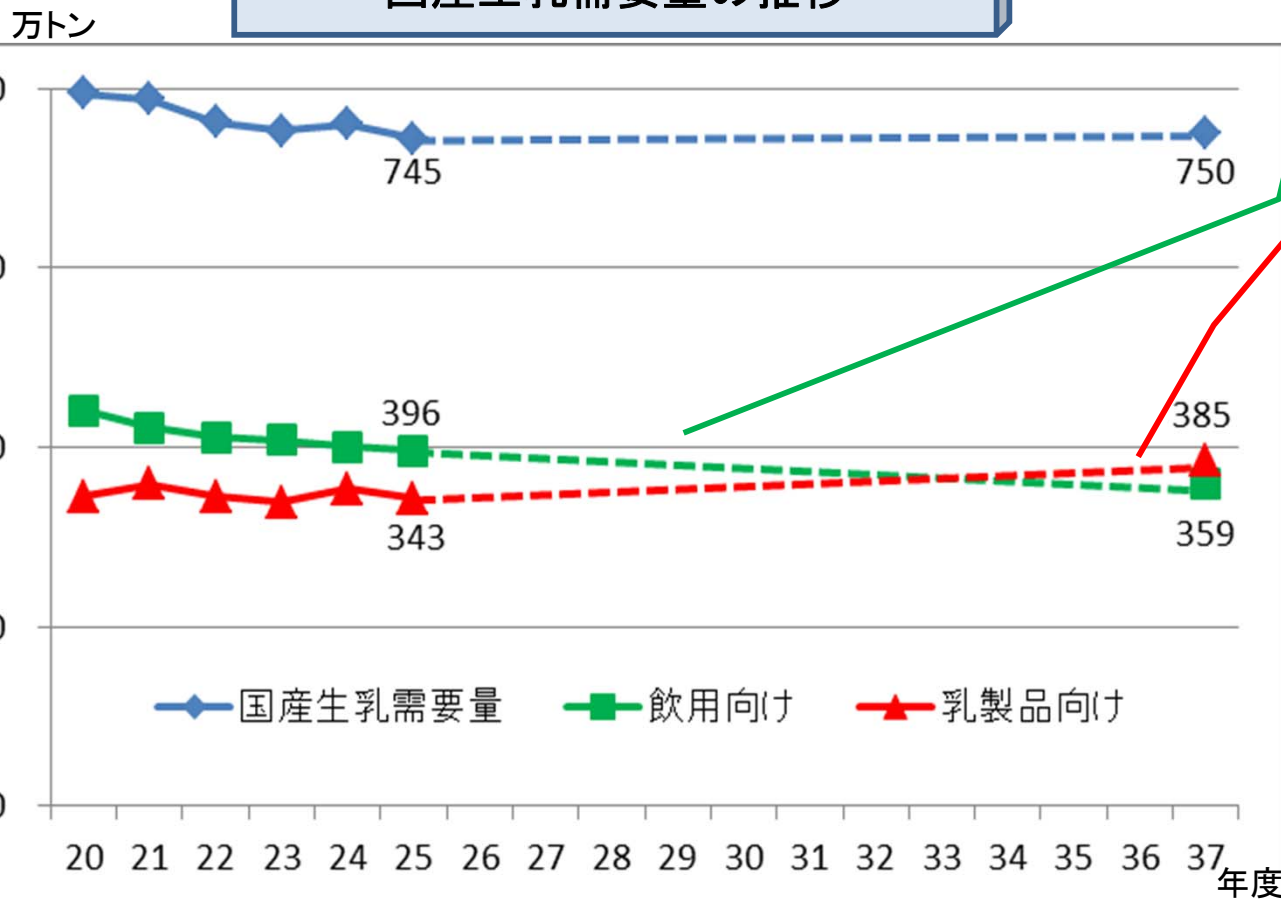
地域目標	現状 (25年度)	見込み (37年度)
全国	60	63
北海道	7.2	7.2 ~ 7.9
都府県	52.4	52.4 ~ 57.9
東北	10.1	10.1 ~ 11.2
関東	3.3	3.3 ~ 3.7
北陸	0.3	0.3 ~ 0.3
東海	1.2	1.2 ~ 1.3
近畿	1.9	1.9 ~ 2.1
中四国	3.2	3.2 ~ 3.5
九州	32.4	32.4 ~ 35.8

# 国産生乳の需要量の長期見通しについて

国産生乳の需要量：飲用向け359万トン、乳製品向け385万トン

- 飲用向けは、人口減少等により減少傾向で推移するが、①カルシウムや乳脂肪の摂取などに関して、高齢者を始めとする世代ごとのニーズに対応した新商品の開発、②牛乳等を利用した減塩和食である「乳和食」の推進、③LL牛乳の輸出促進等の消費拡大対策等により減少幅を圧縮して、37年度は359万トン(25年度比▲38万トン・▲10%)となる見込み。
- 乳製品向けは、チーズや生クリーム等の需要が引き続き増加すると見込まれることから、37年度は385万トン(同+42万トン・+12%)に増加する見込み。
- 以上により、国産生乳需要量は、現状とほぼ同水準の750万トン(同+5万トン・+1%)となる見込み。

国産生乳需要量の推移



・消費拡大対策等により需要量減少幅を圧縮(各人が毎月牛乳パック1個(200ml)を多く飲むイメージ)。

・チーズの需要増加に伴い、国産ナチュラルチーズの需要が増加。また、生クリームの需要も増加。

地域別飲用向け需要量の見通し

(単位: 万トン)	現状 (25年度)	見通し (37年度)	
全国	396	359	
北海道	16.9	14.7	~ 15.5
都府県	379.5	335.2	~ 352.1
東北	28.3	23.7	~ 24.9
関東	153.8	138.5	~ 145.7
北陸	16.7	14.3	~ 14.9
東海	35.3	31.8	~ 33.4
近畿	64.8	57.2	~ 60.0
中国四国	35.4	30.3	~ 31.7
九州	45.2	39.4	~ 41.5

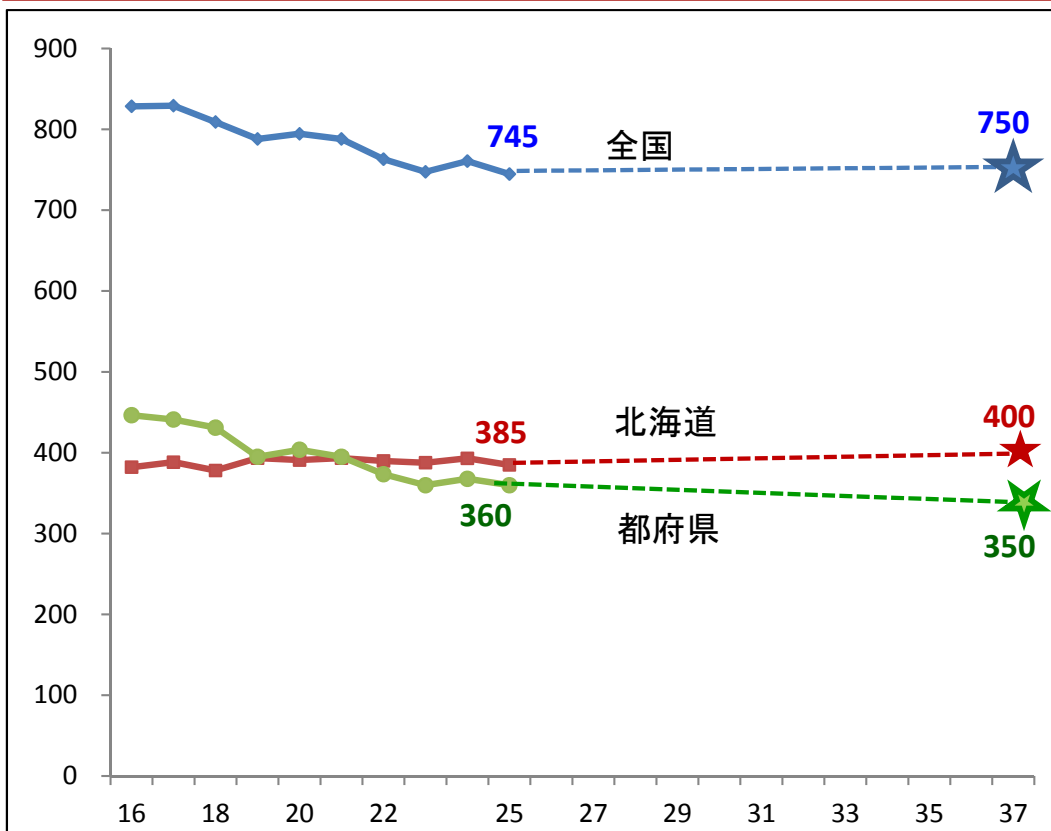
# 生乳生産量と乳用牛の飼養頭数の目標について

## 生乳生産量と乳用牛の飼養頭数の目標: 750万トン、133万頭

- 37年度の生乳生産量は、飲用向け需要量が低下する一方でチーズ等の乳製品向け需要の伸びが見込まれること等を踏まえ、目標を750万トン(25年度比+5万トン)に設定する。
- この生乳生産量は、家畜改良の進展や生産性向上(1頭当たり乳量の増加や供用期間の延長等)を織り込んだ上で、37年度の乳用牛飼養頭数の目標を133万頭(同▲7万頭・▲5%)と設定し、達成を図る。
- この際、生産基盤強化や効率化等の取組を推進することにより、
  - ① 乳製品向け主体の北海道については、生乳生産量を現状より高い水準に設定する。なお、飼養頭数については、1頭当たり乳量の増加等を織り込んで、現状よりやや低い水準の目標を設定する。
  - ② 飲用向け主体の都府県については、飲用需要の低下が見込まれる中、生産基盤確保のための取組等による減少幅の縮小を加味し、趨勢より高い水準の目標を設定する。

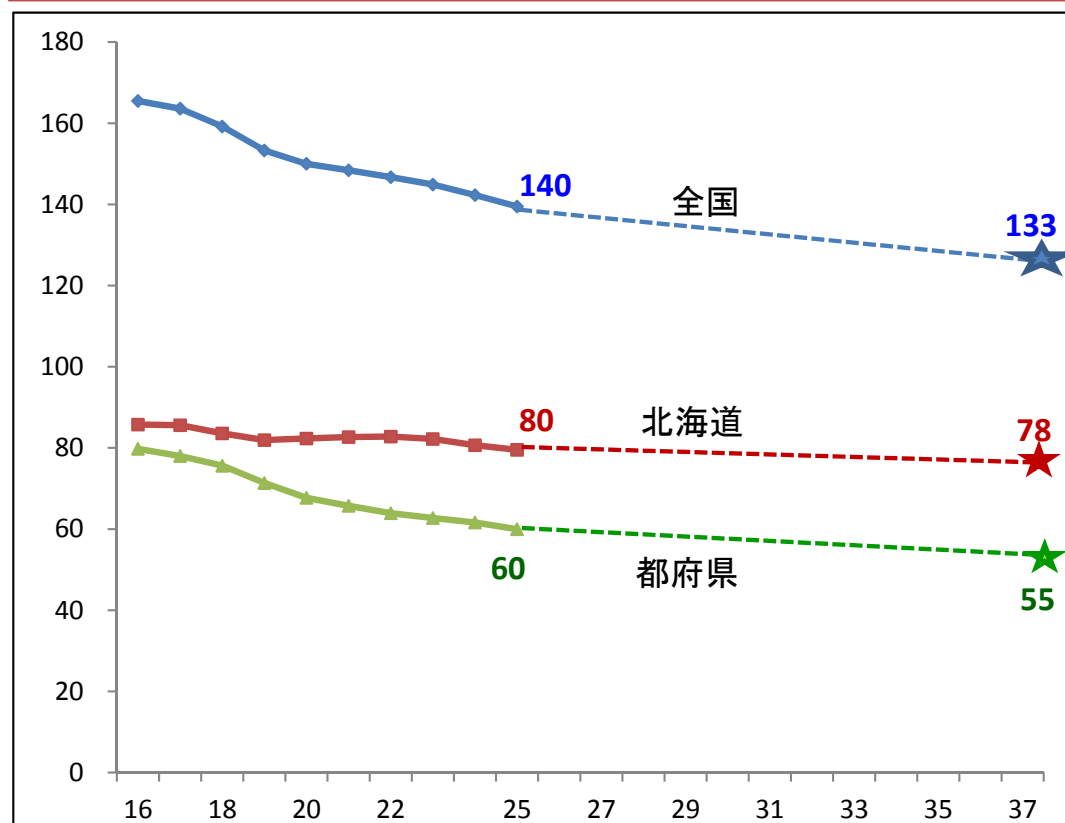
生乳生産量の目標

(単位: 年度、万トン)



乳用牛の飼養頭数の目標

(単位: 年度、万頭)



注: 地域ごとの目標は幅をもって設定するが、本資料ではその幅の中央値を記載。

## 生乳生産量と乳用牛飼養頭数の目標の考え方について

### 生乳生産量

- 過去10年間における生乳生産量は、北海道が概ね横ばいないし微増傾向で推移する一方、都府県では減少が続いている状況にあるため、全国では約100万トン減少。
- こうした中で、37年度の生乳生産量については、乳製品向け需要の伸び等に即し、現状の745万トンから5万トン増の750万トンを目指す。
- この場合、北海道については、過去10年間のトレンド等を踏まえ、現行の385万トンから15万トン増の400万トンへの生産量の拡大を目指す。
- 一方、都府県の目標は、生クリーム等への仕向け拡大を加味した上で、飲用向け需要量の減少幅(▲37万トン)を下回る減少幅(▲10万トン)にとどめ、現状の360万トンから350万トンと設定する。

### 飼養頭数

- 過去10年間における北海道、都府県別の乳用牛飼養頭数は、生乳生産量の傾向と同様に推移。
- こうした中で、37年度の経産牛の飼養頭数については、家畜改良の進展や生産性向上による1頭当たり乳量の増加(8,100kg→8,700kg)等を織り込んだ上で、現行の89万頭から3万頭減の86万頭と見込む。
- この場合、経産牛の供用期間の延長(3.5産→4産)等の取組により、必要な乳用後継牛(未經産牛)頭数の減少度合いは経産牛より大きくなると見込まれる。
- これらを踏まえ、乳用牛の総飼養頭数の目標を現行の140万頭から7万頭減の133万頭(北海道78万頭、都府県55万頭)に設定する。



# 生乳生産量と乳用牛の飼養頭数の目標

## 生乳生産量

(単位: 万トン)

地域目標	現状(25年度)	目標(37年度)	
全国	745	750	
北海道	384.9	380.0	~ 420.0
都府県	359.8	332.1	~ 367.0
東北	59.8	55.0	~ 60.8
関東	129.1	119.1	~ 131.6
北陸	9.8	9.0	~ 9.9
東海	29.6	27.3	~ 30.1
近畿	19.3	17.6	~ 19.5
中四国	43.1	39.7	~ 43.9
九州	69.2	64.3	~ 71.1

## 乳用牛の飼養頭数

(単位: 万頭)

地域別目標	現状(25年度)	目標(37年度)	
全国	140	133	
北海道	79.5	74.3	~ 82.1
都府県	60.0	52.2	~ 57.7
東北	11.0	9.5	~ 10.5
関東	20.9	18.2	~ 20.1
北陸	1.5	1.3	~ 1.5
東海	4.2	3.7	~ 4.1
近畿	3.0	2.6	~ 2.9
中四国	7.1	6.2	~ 6.8
九州	12.3	10.7	~ 11.8